

結草

k u s a m u s u b i

No.27

Publishing house: 2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2019.03.01

尊き人として出会う

道因寺住職

相馬 豊

こんにちは。浄光寺さんの報恩講、先程は御満座のお勤めが無事勤まりました。親鸞聖人の遺徳を偲んで、親鸞聖人と出遇った方々が、その出遇った喜びとして、もう一度その事を確認をしていく報恩講。そのことが七五六年という長い年月を経て人間のいのちの事実、そして人間に生まれてきた事実、その事を問いただしていく。その道を確認かな道として歩んでいかれた。その歩まれた方がまた人を生み出して、その道聞き開いて行った、その歴史がこの報恩講の歴史でもあります。

そうしますと、報恩講が各寺院で執り行われ、そして門徒さんのお家の方でもおとりこし報恩講という御内仏を中心とした仏事が執り行われます。報恩講というのは、親鸞聖人のご法事を毎年毎年、私達が勤めていくということになります。そのご法事を勤めていくという事にありますと、その中心として、供養という大きな一つの課題が出て参ります。亡くなった方を供養するとかたかた私達はご法事を勤めていく。あるいはお盆にお墓参りをします。供養ですから、お寺さん

に読経をしていただくという供養もあります。あるいはお花を飾るというのも供養の一つ。あるいはお供え物をするという供養もある。供養と聞いてみても様々な供養のあり方がある訳ですけども、その供養という事の全体は何を表しているかと申しますと、尊敬という事です。

尊敬という念が供養の中心となつていきます。色々な供養の仕方がありますけれど、その全体は尊敬という事です。それは亡き方と出遇えて本当によかった。あなたの存在がなければ今の私が本当に人間として独り立ちして生きるといふ方向さへも見出せなかつたかもしれない。あなたという存在が私に確かなものを伝えて下さいました。亡き方を尊い、尊敬する、それが供養の一番の中心となつていきます。それは亡き方だけではなくて、親鸞聖人もそうであり、蓮如上人もそうである。また私達にとつて有縁の方々も。そういう尊敬の念を持って供養という仏事が執り行われている。

藤元正樹さんという方が、大切な

お母さんを亡くされた。その事実の中に、自分の中に確かな記憶として残っているお母さん、その事をもう一度、自分の中に蘇らせていって、自分の中でお母さんはどういった存在だったのだろうかという事を言葉として伝えて下さいました。

母去りて はじめて親の恩を知る
母去りて いのちの重さを知り
母去りて 身の無力を知る
母去りて はじめて人間を知る
尊きは去りて はじめて母となりし人

こういうお言葉を藤元正樹さんが大切なお母さんを亡くされた後に自分の確かな記憶の中でお母さんという存在が私にとつてどういう存在であったのか、そのことをこの言葉の中に託されました。そして一番最後には「尊き」と「人」という言葉づかい。「尊き人」、なかなかこういう言葉遣いを私達はできないのではないのでしょうか。多くの身近で大切な人を見送ってきた私達。その見送ってきたお一人お一人を本当に尊き人と自分の言葉として表現できているのでしょうか。亡くなったことに

対する辛さや悲しさといった自分の感情を持ちますけれど、そこに尊き人と呼べるということが一番大事なのではないでしょうか。正に尊き人、自分にとってお母さんという存在は大事な人であるけれど、自分という一人の人間を生きていく時に母親を尊い人としてもう一度出遇い直されたという事です。

く さ む す び

冒頭に「母去りて、初めて親の恩を知る」と。現在我が家には九三歳と九一歳になる両親が健在です。お寺でお参り事が終わった後に、お参りされた方々がですね、私に「お父さん、お母さんを大切にしておいて下さいね」と言葉をかけて下さいます。それで「はい」という返事は致しません。自分達兄弟をここまで大きく成長させてくれたという親への愛情もあります。色んな事をわかっています。わかっているんですけど、今生きておりますから、やはりその生きていくところまでぶつかり合うという事もあります。親の恩という事が重々わかっているても本当にわかっているかという疑問符が付

きます。

それから「母去りて、いのちの重さを知る」、命の大切さということ、自分自身わかっている。しかし、いつの間にか自分の理性、分別心で生きてしまっている。自分の命だからありのままに生きたい。自分の思い通りに生きる事が自分だと錯覚をします。そして、命の大切さという事もわかっているけれども、本当にそのことが全身に及んで一日一日を過ごしているかというところではない方が多いわけです。当たり前のように目が覚めて一日を過ごし、当たり前のように床に入って、また次の朝当たり前のように目覚める。そして目覚めて日々の生活に振り回されっぱなしです。いのちの尊さという事が本当に頷けているなら、まずは朝起きた時に、自分が自分に合掌するという事が当然ではないでしょうか。自分が自分に合掌する、それは自分のいのちというものに対して合掌していくということ。しかし、そういうことも忘れて自分の命だから、自分の豊かで楽しい人生だ

からとそのことばかりに目が向いてしまう。また、いのちといっても自分の命はここにあるけれども、よくその命というものを振り返ってみれば、私達には多くの問題をそこに孕んでいます。それは、殺すという問題です。

私が命を生き続けているという事は、そこには殺すという事実があります。私達が食べてきたということは、動植物の生命を殺してきた歴史でもあります。その生命を頂きながら生きています。食事のひとつひとつをとって見ても、この食事は好き嫌い、この食べ物嫌い好き嫌い、嫌いを言います。家族の事を心配して手作りしてくれた食事でありながら残してしまい、残飯として処理されていく。そこにいつの間にか悲しさや痛みも忘れてしまう。自分の好きな物だけを食べて、嫌いなものは残す。いつの間にか自分自身に慢心の心が広がっていく。言葉としていのちという事はわかる。しかし単なる命ではなくて、自分を支えているいのちとはどういふのちであるのか。そこに大きな問題があります。

またこの私自身の存在と言ってみても、もう一つ悲しい事実を持っています。それは生まれてきたと言う事実であります。それは単に生まれてきたという事だけでなくて、死すべきものとして生まれてきたと言う事実です。死すべきものとして生まれてきた。このこともいつの間にか私達は忘れてきているのではないのでしょうか。私もですね、おばあちゃん子として育てられましたけれども、なぜおじいちゃんやおばあちゃん、孫やひ孫をあれだけ可愛がるんだらうか。そのことを自分があばあちゃん子として育てられたことと重ねて見た時に一つ気が付きました。それは単に、孫やひ孫が可愛いだけではない一面があるということです。私達がこの年齢まで生きてきたという事は、自分が生まれてから今日までの時代や社会を通して見えてきた事、聞いてきた事を背負いながら今この年齢まで生き続けてきたということなんです。色んなものを見て、そして聞いてきた。その見てきた事、聞いてきた事で確かな記憶として一番鮮明に残っているのは身近な方を

亡くしていったという記憶でないでしようか。いつまでも一緒に楽しく過ごしていたと思っていた人が、あの人も亡くなり、この人も亡くなっていったという事を見てきた。

そうすると、知っているんですね、私達は。人が亡くなっているという事を。家族が新しく増えて賑やかになることは嬉しい。しかしその嬉しさだけではないということを知っているからこそ、おじいちゃんやおばあちゃんは孫に愛情を注ぐわけです。なぜ可愛いのか、なぜ愛情を注ぐのか。ここに死すべきものが生まれてきたという事の痛みを知っているからではないでしょうか。だから大切に大切に愛情を持って可愛がっているんです。ただ、孫やひ孫が可愛いだけじゃない、知っているんです。死すべきものがここに生まれてきたことを。同時にこの子の成長を最後まで見る事ができない我が身であることも知っているわけです。だからこそ可愛くて可愛くてしようがない。そこにいのちというものの尊さや重さを知るわけです。

しかし、最近はずいぶん出来事が毎

日のように新聞に出ています。命を自ら絶たなければならぬ事実であつたり、我が子でありながら虐待をして命を奪っていくご両親。色々な事が新聞の中に出ています。その最も大きな原因は、いつの間にか死すべきものが生まれて来たということとを私達は忘れてしまっているという事ではないでしょうか。自分も我が子も孫もひ孫もみんな死すべきものとして生まれてきた。もしこの一片を自分の中に持っていれば、そのいのちというものの重みや尊さを本当に感じ取れるのではないのでしょうか。

また「母去りて 身の無力を知る」と。この身の無力を知ると藤元さんの言葉と自分が経験してきたことで繋がったことがあります。それは自分の祖父が亡くなった時でした。祖父が亡くなる三日前から私のおじ、おば達がですね、お寺に泊まり込んで祖父の看病に当たっていました。その一人のおばがですね、自分にできる事がないかと祖父の布団の中に手を入れて膝から足首にかけて

ずつとさすり続けていました。それから毎日のようにお医者さんが往診に来てくれたわけですけど、十一月十六日に祖父は命を終えられていきました。その時、往診に来られていたお医者さんがご臨終ですと時間を告げられた。集まっていた親族達はみんな一斉に涙を流されました。そして布団の中に手を入れて膝から足首をさすっていたおばがですね、涙流しながら、こういう言葉言い続けていました。「戻ってこい、戻ってこい」と。

私達が自分の大切な人を見送っていく時、看取りと言う中で唯一何ができるかといえば、このおばのように、さすり続ける。あるいは手を握る、言葉をかけ続ける、これしか私達にはできないということです。代わってあげたいけど代わる事もできない。また代わってもらうこともできない。では命終えていく人を前にして私達が唯一できることといえば、さすり続ける、手をにぎり続ける、言葉をかけ続ける、そしてその事実には涙を流しながら焼き付けていくことしかできない。正に身の無力というものではないでしょうか。

「母去りて はじめて人間を知る」。人間という事実、それは父母を縁として生まれてきたという事実に始まりません。無邪気な子供の時間を過ごして、言葉を覚えて、会話をできるようになる。言葉というものはなかなか相手に伝わりにくいという事もあります。言葉を通して誤解というものが生じてきます。そうするとそこにはいがみ合うという事も出てくるし、苛立ちという事も出てくる。またそのことを通して、なぜ人間は仲良くできないのであろうかという事も出てくる。そしてそのことを通して苦しんでいくという事実もあります。

あるいは、この人も亡くなり、あの人も亡くなり大切な人が亡くなっていくという事実の中で、人は何故亡くなっていくのだろうかという悲しみを感じる。それは人だけではなく自分が大切にしていたものがなくなったり、壊されていた時、やはりそこには悲しさというものが出てきます。あるいは、努力精進をし

たけれど、結果が伴わなかった時、挫折というものを味わいます。また色んな事を経験していけば、不安というものも出てきます。そういうことを通して一つ一つ学び教えられて成長してきています。

今度は自分が年を追うことによつて自分が今まで出来てきた事を一つ一つ手放して行かなければならぬ悲しさに出会って行きます。今まで自分で料理を作っていた。しかし、いつの間にかその包丁が持てなくなつてきた。そうすると、お嫁さんに家事を渡していかなければならぬ。色んなかたちで自分が今まで出来た事が一つ一つできなくなつていく。それが老いの事実です。老いというのは、ただ単に年を追うていくだけではなくて悲しさなんです。自分が出来てきたことが一つ一つ出来なくなつていく悲しさです。その悲しさを持ちながら、孤独の身を生きて、そして最後は静かに息を引き取つていく。それが私達人間の事実です。しかし、私達はその事実を知っています。なかなか自分の事としては受け入れることができないので

はないでしょうか。死すべき者が生まれてきて、そして死んでいくことは知っています。しかし私達はそのことを先送りしていることはないでしょうか。まだ未来はあるよと、なかなか自分が亡くなつていくというところに立てないですね。

そのことを蓮如上人が『御文』の五帖目十六通「白骨の御文」の中でこういうお言葉を言われました。「されば、いまだ万歳の人身をうけたりという事をきかず。一生すぎやすし。いまにいたりてたれか百年の形体をたもつべきや。我やさき、人やさき」。蓮如上人がこういうお言葉を述べられています。中陰勤行の後に読まれるし、七日七日のお参りの後にも繰り返して「白骨の御文」が読まれます。そうしますと、「白骨の御文」は亡くなつた方に対して読むというよりも、その悲しみを抱きながらここに集まつたお一人お一人に聞いて頂く言葉です。私達は人間であるということを知っています。しかし、一番大事な中心点を忘れているのではないのでしょうか。その中心を蓮如上人が「万歳の人身をうけたりという事

を」どうか聞いて下さい。尊い一人の人が亡くなつていった事実の中にあって、その方を通してもう一度教えられていた。その中心は「いまだ万歳の人身をうけたりという事」ですよ。そのことをあなたも私もどのようにして頂いておられますか。そのことを繰り返して、私達に語りかけて下さっている。初めてその人間の事実に出遇つていった。

そしてその全体を藤元正樹さんは「尊きは去りて初めて母となりし人」と。先程申しましたように毎日両親と顔を合わせております。顔を合わせているという事はそこで出会っているということなんです。出会いはしているんですけど、その出会ひの中で何を見てきたのだろうと。朝起きて両親と対話して、そして晩寝るまでの間の中でも会話をします。出会っているんですよ。出会つていながら、そこに私達がどういいう出会ひをしてきたのか。

出会つた方々、特に先にお命を終えられて行かれた方々を単に亡き人ではなくて尊き人と供養する。読経

という供養もあります。お供えをするという供養もあります。荘厳を綺麗にするという供養もあります。しかし、その一つ一つを問題にするのではなくて供養の全体が尊敬の念なんです。一つ一つの事柄が繋がって尊敬となる。先ほどこの本堂で報恩講が執り行われました。それは親鸞聖人の遺徳を偲ぶという事だけではなくて尊敬の念ですよ。大切な事を今私達に伝えてくださっている。そのことにもう一度出遇い直して行く。普段忘れていたこと。見失つていたこと。人間というものが何であつたのかということをもう一度気づかせてくれる。それが今日の報恩講のお勤めではなかつたでしょうか。

昭和の初期に文学界で活躍された齋藤茂吉さんという方がおられます。文学に志を持って東京に出て文学を学び、そして作家として活躍された方です。その齋藤茂吉さんが山形に残されていたお母さんの訃報に接してお通夜、葬儀の後、お骨を拾うという事を通して、次の様に齋

藤茂吉さんが語りかけられました。

灰のなかに母をひろへり朝日子の
のぼるがなかに母をひろへり

く さ む す び
こういう言葉を残して下さい
ます。現在は火葬場は約七十分から
九十分で茶毘が終わります。その後、
お骨を拾うという事をします。本来
なら「灰の中より骨をひろへり」と
いうのが現代的な言葉遣いでありま
す。しかし斎藤茂吉さんは骨をひろ
へりと言っておられません。「母を
ひろへり」です。朝日子が登る中で
すから、斎藤茂吉さんの時代、一昼
夜茶毘にふせたという事でしょう。
そして明け方、太陽が登る頃に灰に
なったその中からお骨を拾うけれど
もその一つ一つが母の生涯です。そ
のお骨を拾う、そこに母という存在
を拾う。自分の中に確かな記憶とし
て残っている母親への想い、気持ち、
願い、色んなものを思い出しながら、
「母をひろへり」です。この斎藤さん
のお言葉も藤元さんの最後のお言葉
と通じるのではないのでしょうか。

(5)
これは皆さん方も大切な人を見

送って、そして骨壺にお骨を納めら
れておりますからそのことを思い出
していただいたらどうでしょうか。
単にお骨を拾っていたんでしょ
か。改めて亡き母、亡き父、祖父母、
兄弟、我が子、一人一人の尊い人の
人生を拾い続けて来たのではないで
しょうか。そこに今の私というもの
は単に自分の力で生きてきているわ
けではない。両親、祖父母どれだけ
多くの人からの願いがかけられてい
たか。そのことを藤元さんは尊い大
切な人を亡くして記憶を蘇らせた時
に、尊い母さんという存在にもう一
度出遇い直したんでしよう。私みた
いに毎日出遇っているが、本当に
出遇っているのかというと、素通り
していたのかもしれない。出遇って
いながら、大切なことを見えていな
いということですよ。

「尊きは去りて はじめて母とな
りし人」。死というものはそこで終
わりでないという事を言いたいの
です。大切な人を亡くし茶毘にふせて
白骨となっていく。その後、御命日
にお参りをします。日々のお参り
をする。しかし、それだけで終わる

のではない。死は終わりではなくて
出発点なのでしよう。日々忘れてい
たことを、見失っていたことを蘇ら
せてくれる出発点です。そこに改め
て出遇いというものがあるのではな
いか。自分に出遇っていくという事
です。悲しさを背負いながら、自分
と出遇っていく。その自分を支え
てくれる尊き人が今も自分の中に生
き続けている。それが尊敬という言
葉遣いではないのでしょうか。

亡くなった方、お一人お一人を改
めて尊き人と呼べるということで
す。ただ亡くなった人というので
はなく、尊き人です。あなたと出遇
えて本当によかった。あなたという
存在がなければ一人の人間とし
て生きていくということさえできな
かったかもしれない。人生を歩む道
標となった方、それはあなたです。
あなたの存在が私に確かな道を歩め
と、伝えて下さっています。そうい
う出遇い、それが正に報恩講の出遇
いです。親鸞聖人、蓮如上人に出遇っ
ていく。まさに親鸞聖人がその生涯
をかけて追い求めた確かな道、その
ことにもう一度私達が出遇い直して

いく。そうすると親鸞聖人が語りか
けて下さった言葉や、蓮如上人が語
りかけられていること一つ一つが私
に尊き事を教えて下さる。

つい先だってもです、七三歳で
亡くなられたご門徒さんが、お寺
に来た時にこういう事を言われまし
た。「こうやってお寺に来て、お話を
聞いて正信偈のお勤めをしたりして
いているのですが、正直言ってお話
を聞いても何もわかりません。ただ
し、自分の亡くなった父親がずっと
お寺や御内仏の前で座って勤行をし
ていたことは確かにずっと残ってい
ます。仏教の話はわからないけれど、
今の自分に言えることは、その父
親が残してくれたその姿でした。こ
の姿こそ間違いのない自分自身が領
けるからお寺に足を運んでいるんで
す」。こういう事を言われた。先に歩
いた方が「これが自分だよ」と生活
全体を通して示して下さいました。その
後ろ姿を見てきただけ。でも父を亡
くしてその事を振り返って見た時、
御内仏に参る、お寺に参るというこ
とや、そのお話の中身はわからない

けれど、何かそこに確かなものがあるのではないか、そういう大切な事を亡くなる前に言っておき下された。私より先にこの道を歩めと言われた方がいるんだな。その道を歩んでいく、そこに改めて亡き方と出遇い直していくということがあると思います。

く さ む す び

また蓮如上人がですね、こういうお言葉を『蓮如上人御一代聞書』の中で述べられています。「朝夕は如来・聖人（親鸞）の御用にて候ふ」これだけの短い言葉です。朝夕というのは朝夕のお勤めの事です。正信偈のお勤め。お寺でお勤めがあがる。ご法事の時にもお勤めがあがる。あるいはお寺さんに来て頂いて御命日にお勤めがあがる。またそれぞれの出家で朝夕にお勤めをされている。それは単に正信偈や阿弥陀経を誦するのではなく、蓮如上人はそのお勤めのお心をこの言葉で託されました。「如来聖人の御用」と。読経するお心は何ですか？といえ、それは如来、親鸞聖人の声を聞く事がお勤めのお心です。声を聞くんですよ。自分であげているお勤め、お

寺さんが来てあげているお勤め、それは単なるお勤めではない。それは今いる私自身が如来、親鸞聖人の声を聞くということです。その声の中に歴史が開くわけでしょう。今日この私のところまでお念仏の教えを伝えて下さった長い歴史です。今から二五〇〇年前、釈尊によって見出された仏の教え、それが私の所に今届いて来ている歴史です。時代も社会も民族も人種も違う中でこの事一つが大切なことですよと言いつつ来て来た方々によって受け継がれ伝えられてきた言葉が今自分の声となって自らが称えているわけです。そこに歴史が開くわけです。想像も出来なかった大きな歴史が私の背後にあるということなんです。そこにこの自分というものを心配してくださる方々の声が開いてくる訳です。亡き方々や多くの方々が私の事を心配されている訳です。しかしその事に私達はなかなか気づかない。その事を蓮如上人は「朝夕は如来・聖人の御用に候ふ」と。お勤めをするというお心は如来、親鸞聖人の声を聞き、自分の歴史を開くことです。そこに改

めて出遇って見たら、多くの方々が私を支え続けている。そこに尊敬、合掌し、自ら頭を下げざるを得ないということがあるのではないのでしょうか。

昨日は蓮如上人御影堂中のことを申しましたけれど、ずっと合掌の道が続きます。アスファルトに正座されている方々もおられるし、車を停められて合掌される方いらっしゃる。これは間違いなく、途切れることなくです。京都を発つてから吉崎まで。吉崎から京都まで。合掌の道は続いています。これは尊敬ですよ。蓮如上人、あなたと出遇えてよかったと。確かに五百数十年前に亡くなった方だから直接会った事はないです。しかし、語りかけた言葉が私と今存在を支えてくれている。その事に本当にそうだと言いたら合掌せざるを得ないです。紛れもない事実を蓮如上人は教えて下さいました。親鸞聖人も紛れもない私の正体を教えて下さいました。その事に気づき、頷いた方々が合掌をし、そして深々と頭を下げる。ここに尊敬という事が出てきているのではないのでしょうか。

この二日間の報恩講の尊いご縁といまして、最後に藤元正樹さんのお言葉を口づさんでご縁を終えていきたいと思います。

母去りて はじめて親の恩を知る
母去りて いのちの重さを知り
母去りて 身の無力を知る
母去りて はじめて人間を知る
尊きは去りて はじめて母となりし人
どうもありがとうございました。

《編集後記》

◇本文は平成三十年十月十八日、浄光寺「報恩講」結願日中の法話録であります。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。

行事のご案内

「お太子さん」

日：平成三十一年三月二十一日(祝)

時：午後一時

法話：木村宣彰(鈴木大拙館館長)

第七回「おつらくばい」

日：平成三十一年五月十三日(日)

時：午前十時半

落語：笑福亭瓶二

◎三月二十八日より「きこまいけ」を再開します。一緒に正信偈を学びましょう。